「上前日記 1947−2010 上前智祐と具体」の出版にあたって

「上前日記」とは、吉原治良率いる「具体美術協会」の会員であった上前智祐が、1947 年（昭和 22）10 月 20 日（上前 27 歳）から 2010 年（平成 28）11 月 8 日（90 歳）まで 64 年間にわたり、毎日欠かさず記し続けた日記のことで、大学ノートなど計 226 冊からなる。

この日記は、上前が、画家を志した舞鶴時代にはじまるが、その後、神戸に出て吉原治良に師事するようになり、「具体」創立時から解散まで「具体」に在籍していたことから、「具体」をめぐるさまざまな出来事が、上前の視点から綴られており、上前の著書「自画道」をはじめ「孤立の道」などの原資料にもなっていた。その「自画道」は「具体」を語る際に、多くの研究者が引用しており、「具体」を知るうえでの重要な資料となっていた。

「自画道」の原資料であった「上前日記」は、「具体」の研究者のあいだでも、その存在は知られていたが、個人の日記という性格上、上前氏の生前は、研究者たちがその日記に直接的に触れることはきわめてまれであった。

編者は、1999 年、大阪府立現代美術センターで開催された「上前智祐展」の担当者として、展覧会開催に携わるとともに、大阪府での「上前智祐」のまとまった絵画等の作品収集、購入 15 点、寄贈 46 点に、また 2007 年の版画の寄贈 187 点にも関わった。展覧会の際には、この日記を上前氏から直接拝見する機会を得るとともに、主要箇所のコピーを上前氏よりご提供いただき、展覧会カタログで、「上前日記抄録」として記載させていただいた。

その時の「抄録」は、上前と「吉原・具体」との出会いまでを中心に主要部分を抜粋、掲載したものであったが、上前日記の全貌を紹介するまでには至っていなかった。

その後、2012～13 年（平成 24～25）の 11 月～2 月にかけて、神戸市の BB プラザ美術館で「卒寿を超えて－上前智祐の自画道」展が開催され、その日記は、ボリュームのある物品として展示された。その翌年、編者（中塚）と大阪大学総合学術博物館の加藤瑞穂氏が、「具体」研究のために活用させていただきたいと生前の上前氏に申し出たところ、これまでの研究実績を同氏が認めてくださり、ご快諾いただくことができ、当該博物館に寄託、管理されることとなった。博物館では、1 冊ずつ透明フォルダーに整理、保管、001～226 までの番号を付され、表紙目次をデータ化する作業を行い、ボックスで管理されている。

この一連の作業は、平成 28 年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金 基盤研究（C）課題番号 16K02266「具体美術協会」再考―複合的視点から見直す戦後日本美術の一断面―）による調査の一部として、加藤氏の主導で進められた。

日記の読込み、データ入力、分析については、かつて、中塚が、大阪府立現代美術センターでの展覧会開催時に、ある程度おこなっていたが、その時は時間的な制約もあり、日記全体にまでは及んでいなかったため、今回、あらためて中塚が行なうことになった。

平成 28 年4月からほぼ毎週1回、博物館に通い、毎回3～4時間程度のペースで、上前日記の閲覧と上前、具体、美術関連事項のデータ化を進め、この 3 年で（4 時間×4回×12 ヶ月×3 年＝

576 時間）、学生による目次の入力作業や校正などを含めると、ほぼ 600 時間近い時間を費やしている。

日記には、上前智祐の日々の生活、出来事、絵画制作への心情、家族・友人・職場の出来事、友人との交友、吉原治良との出会い、吉原への師事の詳細、「具体」メンバーとの交友、個人的な金銭の出納記録、金銭貸借関係、給与明細、作品制作の記録、展覧会の鑑賞記録、夢の記録、神戸に出てくるまでの経歴とおいたちなどが詳細に、赤裸々に記録されている。細かい字でノートいっぱいに、びっしりと、ぎっしりと書き込まれたその日記は、上前智祐という人間そのものであり、ほぼその全人生が、本人によって詳細に記録され、綴られているといってよいであろう。また「日記」には、「具体美術協会」が成立する前後の事情や「野外展」をめぐる動き、師・吉原治良との詳細なやりとり、タピエ来日に関する詳細など、「具体」の活動の詳細と舞台裏、同時代の関西の美術界の様子などが、上前智祐の立場から語られており、「具体」を中心とした、同時代の関西の美術界を語る上でも第一級の資料となっているといえよう。

上前智祐氏は、残念ながら平成 30 年（2018 年）4 月 16 日、97 歳で老衰のため亡くなられた。葬儀は近親者のみで行なわれ、その後、偲ぶ会なども開催されることもなかったが、国内外の国公立の美術館や所蔵家、アトリエに残された作品、資料、そして、何よりも、この日記が、上前智祐という画家を偲び、理解するなによりの遺品・資料となっているといってよいであろう。今回、故上前智祐氏の生前の活動と人生、業績をあらためて偲ぶとともに、この日記の公刊が、少しでも今後の「具体」研究に資することができればと、上前日記の公刊に至ったものである。

「具体」関連の展覧会の開催と研究は、芦屋市立美術博物館、兵庫県立美術館をはじめ、大阪中之島美術館（準備室）など関西地域、国内外の美術館、大学、研究者などによっても、これまでも重ねて行なわれてきており、それなりの蓄積がある。しかしながら、吉原治良をはじめ、白髪一雄、元永定正、嶋本昭三、村上三郎、田中敦子のように「具体」の主要メンバーとしての位置づけがなされていなかった上前智祐については、これまで言及されることが少なかった。このことについては、さまざまな要因があげられるが、この日記の公刊によって、「上前智祐」と「具体」および関西の戦後美術史の研究に、あらたな側面から光が当てられることを願う次第である。

最後になりましたが、その晩年、「上前日記」のご寄託にご快諾いただいた、故上前智祐氏をはじめ、今回の「上前日記」の出版に、ご理解、ご支援、ご承諾いただいた、ご子息の上前祐二氏、ご遺族の皆様、上前財団の関係者、また、出版助成をいただいた公益財団法人神戸文化基金の関係者、さらに「日記」の保管、整理、閲覧のご便宜をはかっていただいた大阪大学総合学術博物館、加藤瑞穂氏、編集協力者にこの場を借りまして厚く御礼申し上げます。

2019 年（令和元） 12 月

編者　中塚宏行（大阪府府民文化部文化課・研究員、美術評論家）

「上前日記 1947-2010 上前智祐と具体」掲載（2019 年 12 月 15 日発行、中塚宏行編）